■ 書　　評 ■

朝倉隆太郎編著『地域に学ぶ社会科教育』
（東洋館，1989年）

高山　次嘉

本書は、編著者の朝倉先生が筑波大学から移られて５年間お勤めになられた上越教育大学を今年度をもって定年退官なされることと、「地域の」大学を目指す上越教育大学の開学１０周年とを記念して、朝倉先生と先生にご指導戴いた上越地方の大学と小中学校の教師が分担執筆し出版したものである。

第一部は理論編で、地域と地域学習の本質（朝倉）　社会科教育における地域研究（井田仁康）地理教育と地域（赤羽孝之）　歴史教育と地域（加藤章）　公民教育と地域（山本友和）　僻地教育と学習指導の改善（高田喜久司）　地域における国際交流学習（大嶽幸彦）　地域経済開発と経済学習（鈴木敏紀）　地域の堀りおこしと戦争学習（二谷貞夫）の９編の論文からなっている。

朝倉先生は「地域と地域学習の本質」において、昭和44年版中学校学習指導要領改訂に委員としてかかわられた際、「郷土」を「身近な地域」に改めしかも方法原理を第一義とすることに対して強く反対されたその理由について次のように述べられている。学習対象に関心と愛情がなくては、学習は成立しない。「を教える」ことと「で教える」こととは同時併存でなければならない。高度経済成長政策とそれを推進する中央集権制とが過密と過疎、環境破壊、構造不況を発生させ、地方自治の芽を摘み取っている。「郷土」の語は古臭いと言うが、それが有する主体性・土着性・安住性を捨てて、地域の語が有する客体性・解放性・流動性にのみ目を奪われてよいのであろうかと。

郷土への関心と愛情、主体性と土着性、ここに先生が社会科の創設から４０余年の間、一貫して創り育て、実践し理論化し指導して来られた朝倉社会科の本質があり、先の指導要領改訂における性急強引な高校社会科解体に先生が身をていし敢然と抗議し守ろうとされた社会科の思想と方法がある。この朝倉社会科の思想と方法は第Ⅱ部の実践事例の中にも脈うっている。

今日では「地域」の語は地域住民・地域センター・地域主義・地域学習など、主体性・土着性の主張と温もりの感じられる語として使われるようになった。朝倉先生も新たな意味をもつ「地

域」が、①社会事象を意味づける場　②社会生活の原則を発見させる場　③社会の発展を願う気持ちを養う場　④社会科の学習能力を育成する場として社会科学習に大きな意義を有することを説いている。

加藤章氏は「歴史教育と地域」において、最近の歴史学研究の動向をふまえ、日本海文化との関連、日本の東西文化の境界接触地帯、中世以降の政治的意図による結節地域の３つを「上越地域からの歴史教育（教材化）の視点」として挙げ、実証的研究の成果を地域住民としての歴史意識に転化させる作業こそ、歴史教育者の役割であると論じている。

「地域の掘りおこしと戦争学習」のなかで、新指導要領の東郷平八郎登場などにみる戦争賛美ないし肯定論への傾斜を懸念する二谷貞夫氏は、誰が何のために戦争を進めどのように戦争を正当化してきたかを問い、事実認識から科学的認識へそして実践的認識へと高めなければならないが、その困難さを克服する方途は、身近な地域のなかで民衆の生活や心情をふまえて戦争を問いかけ、地域を掘りおこし、地域を見つめることであると、南本町小学校や板倉中学校の子供達の掘りおこしの実践例を挙げて説いている。

第二部は「村の５年生」などの優れた実践記録を出版されている江口武正氏のまさしく“地域に根ざした社会科実践”40年の歩みと、氏と共に上越のみならず新潟、さらには日本の社会科実践に多大の貢献をしてきた「上越教師の会」や「新潟県社会科教育研究会」に集う吉田晴正・小林啓一・金子薫・村山信一・南雲敬子・寺田喜男・中村忠雄・後藤喜代・小林晃彦・筑波啓一・秋山正道・清沢聡・釜田聡の諸氏による地域に学ぶ社会科の小・中学校の実践事例である。いずれも地域に教材を求め、子供と共に地域に出て体験したり調べまわり、考え合い共感的に理解させる授業である。上越という限られた地域での地域に学ぶ社会科の地道な実践であるが、しかし、いや、それゆえにこそ、全国に通ずる、誰もが学べる優れた実践例といえよう。

あえてこの書の難点を指摘するとすれば、執筆者一人当たりの紙幅が少ないために、自説を十分に論じ切っていないと思われる所があることと、“地域に学ぶ”ことが地域で地域を学ぶことに終わり、地域から他の地域や日本・世界を見、他の地域や日本・世界から地域を見詰めることが少しばかり弱いように思われることである。

（新潟大学）